

ての人々のなかに浸透して、それとわからず
に生きのびていることもある。ここに挙げた
三冊は、南アフリカ、ケニア、ナイジェリア
をそれぞれ舞台として、この大陸が育む始原
の叡知に触れようとした名篇。みな白人が書
いたものじゃないか？ そう、おなじ三つの
国に生まれその苛烈な現代史を生きた証言と
してアラン・ペイトン『輝きの大地』、グギ・
ワ・ジオンゴ『一粒の麦』、チヌア・アチエ
ベ『崩れゆく絆』を挙げることもできるのだ
が、アフリカ人たちの著書はなぜかみな絶版
で入手困難。どうしてそうなってしまうのか。
出版社よ、頑張れ！

岩崎 務

(いわさき つとむ)

総合国際学研究院教授 西洋古典文学・ラテン語

ブラトン『ソクラテスの弁明ほか』田中美知
太郎・藤澤令夫訳、中公クラシックス、二
〇〇二年

はじめて読んだとき、ひとつの疑問につい
て問答を徹底的に重ね、思考を深めていくソ
クラテスの緻密な論議に新鮮な驚きを覚え、
思わず引き込まれていました。自他の厳しい

吟味によって明らかにされるのは、「わたし
は知らないから、またそのとおり自分は知ら
ないと思っている」という無知の知。ものを
考えるときの基本的な構えを教えてくれ、
「よく生きる」ということを考え始める出発
点になってくれるでしょう。

エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメシス―
ヨーロッパ文学における現実描写』(上・
下)篠田一士・川村二郎訳、ちくま学芸文
庫、一九九四年

作者という呪縛から解放されて、テキスト
を自由に軽やかに読むこともいいのですが、
テキストに没入して丹念に読むこともやはり
大事です。アウエルバッハは、さまざまな文
学作品から引用して、実に明晰な文体分析を
行なっています。テキストの言語によく通じ、
広い知識と視野をもって読むこと。とくに外
語大生にすすめたい書です。サイドも遺著
で異文化と他者理解の最良の方法をアウエル
バッハに見ています。

岩崎 稔

(いわさき みのる)

総合国際学研究院教授 哲学・政治思想

受験のせいで気づかないうちに勝ち組志向
になっているひとに薦める破格の三冊。まず、
詩人石川逸子の『オサヒト覚書―亡霊が語る
明治維新の影』(一葉社、二〇〇八年)は、
妄想が時空を縦横に跨ぎこす一風変わった書。
オサヒトとは、暗殺されたとも言われている
孝明天皇のこと。かれの亡霊が、維新と近代
化をめぐる薩長土肥のおなじみの英雄物語を
すっかり読みかえていくなかから、帝国日本
がアジアではたらいた暴力の原型が、幕末・
維新にあったことが見えてくる。

二つ目は平井正治の『無縁声―日本資本
主義残酷史』(藤原書店、一九九七年)。苦難
のおいたちを経た平井は、六十年代から金ヶ
崎に住んで、繁栄する産業日本の影の世界に
生きる人々のたくましさと悲しみを、生活者
の身の丈から書いている。いまここにある不
正に深く憤ることが、大塩平八郎の乱など、
過去の反乱と重なりあうという生きた歴史感
覚は、石川に似る。

三つ目は、平井と同じように肉体労働者の
哲人であったエリック・ホフファーの『波止

【アンケート】

教員・図書館職員がえらぶ

新人生にすすめる本

これから大学生活をはじめられるみなさんに、本学教員・図書館職員の方々から推薦図書とメッセージを寄せていただきました。大学生としての読書生活の参考にしていただき、新たな〈知〉の世界の扉を開いていってください。

*所属は2009年4月1日現在のもの。掲載は氏名の五十音順。(編集部)

荒川慎太郎

(あらかわ しんたろう)

アジア・アフリカ言語文化研究所准教授
西夏語学・西夏語文献学

吉村昭『海の祭礼』文春文庫、二〇〇四年

ペリーが、当時鎖国していた日本に來航していたことは知っていますよね？ 鎖国中の日本が、オランダと中国とのみ交流があったことも知っていますよね？ では、ペリーと幕府の役人は何語でやり取りしたか知っていますか？ 日本語でしょうか？ 英語？ オランダ語？ なさそうだけど中国語？ 僕も知りませんでした！ そして本書を読んで知りました。読み終わった後、将来「外国」とかわかることの多そうな、自分より若い人に読んで欲しくなりました。

前半は日本への憧憬を抱いて密入国した米国人、後半は対米通訳に粉骨した日本人が主人公です。前半と後半では印象が変わり、読み手の好みが分かれるかもしれません。少し硬い内容ですが、幕末について漠然とした知識がなくても通読できると思います。外大生に読んで欲しい本ということで本書を選びます。

今福龍太

(いまふく りゅうた)

総合国際学研究院教授 文化人類学・表象文化論

L・ヴァン・デル・ボスト『カラハリの失われた世界』佐藤佐智子訳、ちくま文庫、一九九三年

アイザック・ディネーセン『アフリカの日々』

横山貞子訳、晶文社、一九八一年

J・M・G・ル・クレジオ『アフリカのひとつ』

菅野昭正訳、集英社、二〇〇六年

社会が混沌の度を深め、あらゆるものが絡み合っただけが見えなくなるとき——そんなときは簡潔な世界に還るべきだ。世界がまだ始原の簡潔さを保ちつづけ、功利と情報への強迫観念の嵐から身を守ろうと耐えている、砂と草原と風の土地。そう、私は道に迷いかけたらいつもアフリカに戻る。精神のアフリカに。そこが人類の生誕地であるという理由からだけではなく、それが人間文化のもっとも簡潔な様式が生まれ出た母胎空間だからだ。生活道具、音楽、葉草の知恵、神話。それらのもっともシンプルで力強い形態がアフリカから発生した。あまりにも素朴で、自己主張しない知恵や技芸だから、世界のすべ

能なのか。本書はそのような問題意識のもとに書かれた、刺激的な日本分析である。

大澤正男（おおさわ まさお）

学術情報課 専門員

村上龍『平島を出よ』（上・下）幻冬舎文庫、

二〇〇七年

それほど勉強はしなかったのですが、三十年前私も大学受験を経験し、四月頃に頭の芯に疲れを覚えた記憶があります。これはそんな受験戦争で疲れた頭に格好の本です。少し大部ですが、大変展開がスリリングで飽きさせません。九州が他国の反乱軍により侵略され、それに対して日本政府がズルズルと反撃の決定を引き延ばしているうちに、侵略が既成事実化されていくというのが粗筋です。侵略の開始がゲリラ攻撃であるなど、大変リアルティがある物語です。日本の政治家は無能ではないが、国家としての決断ができない。一方、一般市民は団結して反撃するエネルギーが無い。一体侵略者に対する反撃の糸口は何なのか、というのが物語のキーポイントです。この物語の背景となっているのは、日本

経済の崩壊及び国際社会での日本の孤立で、現状と酷似しています。決して絵空事ではない他国からの侵略という事態を大学生活の始まりに考えてみるのもよいのでは。

岡田知子（おかだ ともこ）

総合国際学研究院准教授

カンボジア語・カンボジア文学

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編『図説 アジア文字入門』河出書房新社、二〇〇五年

本学のホームページ <http://www.tufs.ac.jp/> を見たことがあるだろうか。本学の二十六専攻語で書かれた「東京外国語大学」が浮き上がり、このページを開けるたびに中央の言語が入れ替わる。また附属図書館吹き抜けに飾られたスカラベを中央に配した美術作品を見上げてみよう。そこにはやはり二十六言語に訳された詩がのせられている。本書は、多くの興味深い写真や図版を用いてアジアの文字をわかりやすく解説している。図鑑のように眺めるもよし、好きなページから気軽に読むもよし。専攻語として学ぶ言語の文字はもち

ろん、日本語についてもふりかえり、新たな世界を切り開いてくれる、すぐれたガイドブックである。本書を手にも、本学の中に溢れるさまざまな文字、そして人に出会ってほしい。

小川英文（おがわ ひでふみ）

総合国際学研究院教授 東南アジア考古学

成田龍一さんたちがかつて刊行した『戦争はどのように語られてきたか』（朝日新聞社、一九九九年）が、名前を改め、『戦争文学を読む』（朝日文庫、二〇〇八年）として、二〇〇八年の夏、書店に並んでいた。大岡昇平の『レイテ戦記』（中央公論社、一九七一年）を批判的に読む姿勢に、眼から鱗の書であった。批判的視座の問題は別としても、フィリピンの北部ルソン島山中で三十年近く仕事を続ける私は、フィリピンで戦争を体験し、それによってその後の人生を決定づけられた作家たちの作品に引き寄せられてきた。大岡の一連のフィリピン戦争文学のほかにも、山本七平『私の中の日本軍』（文藝春秋、一九七五年）、高木俊朗『ルソン戦記』（文藝春秋、一九八五年）、今日出海『山中放浪』（日比谷出版、一九四九年）などは、戦争に対する反

場日記―労働と思索（みすず書房、一九七一年）。考えるということがを本当に実践するということがいかに難しいことか。ただの優等生のまま大学生になっちゃいけないぞ。

上田誠治

（うえだ せいじ）

学術情報課 図書情報係

ヴァレリー・ラルポー『幼なごころ』岩崎力訳、岩波文庫、二〇〇五年

ヴァレリー・ラルポーは二十世紀前半のフランスの作家。これは子どもたちを主人公にした十の作品からなる短篇集です。みなさんにとってはそう遠くない子ども時代の記憶が、喜びや痛みやときめきとともによみがえるでしょう。

大学は外語大で、フランス語を専攻しました。もう二十年近くも前になりますが、二年生の後期の授業でこの短篇集の最初的一篇「ローズ・ルルタン」を原書で読みました。

担当は岩崎力先生（現在は名誉教授）。一回の授業で一頁進むか進まないかというゆっくりとしたペースで読み進めたと記憶しています。始めに音読して、何人かが訳を発表して、

それを先生が直し、解説を加えていくという伝統的な講読の授業でした。フランス文学をご専門とされる先生は、複雑な構文を解きほぐし、単語のひとつひとつの意味から表現の微妙なニュアンス、訳語の選定まで、ほんとうに丁寧に説明してくださいました。この授業のおかげで、外国語の読み方、文学を読むたのしみを教わったように思います。

この短篇集が、先生の手によって日本語で読めるようになったことを喜びます。新入生のみなさんには、テストやレポートのための読書の合間に、こうした良質な翻訳文学に多く触れて欲しいと思います。かつてもいまま、外語大の先生方には、すぐれたお仕事がいくつもありますから。

宇戸清治

（うど せいじ）

総合国際学研究院教授 タイ文学・タイ映画論

フロイト「快感原則の彼岸」（ちくま学芸文庫『自我論集』所収、竹田青嗣編・中山元訳）、一九九六年

この本の中で、フロイトは個々の無意識にしまわれていた死の欲動が国家単位で発揮さ

れてしまった第一次世界大戦を見据えている。自己の権利を国家に譲り渡し、存在の根拠を確保しようとした個人は、いくら理性を保とうが、国家単位の破壊衝動には立ち向かえない。ヒステリーや分裂病の治療には、理論より戦争の方が効果的だったりするのは、個人が権利を国家に委ねているがゆえだ。少なくとも戦争がなくならない原因は、フロイトによってここに暴かれているのである。

カレル・ヴァン・ウォルフレン『日本／権力構造の謎』（上・下）篠原勝訳、ハヤカワ文庫、一九九四年

日本に真の権力は存在するか。国会、首相、官界、財界のどこにも究極的な権力というものはないのか。システムの中核は実は真空状態ではないのか。表向きの経済大国としての日本が、諸外国が期待するような明確な国家意志を持ち得ないでいるのはなぜか。与党は政治哲学とは無縁で、予算配分、派閥政治、利権によって権力の座にある。予算と補助金という名の利益誘導に官僚との結託は必須である。それでも日本は高度に中央集権化された国家であり続けている。それはどうして可

②レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹楽
一訳、新潮文庫、一九七四年

①は人間の物の考え方を二つの類型に分けて語ったとても刺激的な本で、しかも著者は努めてわかりやすい言葉で語りかけています。私たちは日々、身の回りのことから世界のこ
とまで自由にあれこれ考えて自分を納得させ、また他人に語りかけています。ですが、私たちの自由な思考は歴史と風土のもたらした様式にとらわれているのです。私はこの本で人間の思考の枠組みの根源を理解するひとつのヒントを得ました。

②は私たち人間の自然に対する、時に傲慢な行動に警鐘を鳴らした本です。私たちは快適さのために、また時に勝手な自己利益のために自然に対してどのようなことでもしてきました。自然が調和を失ったときに私たち人間がどのような痛手を被るか、この本の著者は静かに訴えています。

河路由佳

(かわじ ゆか)

総合国際学研究院教授 日本語教育学

①水村美苗『日本語が亡びるとき―英語の世

紀の中で』筑摩書房、二〇〇八年

②アーサー・ビナード『釣り上げては』思潮社、二〇〇〇年

③リービ英雄『千々にくだけで』講談社、二〇〇五年

東京外国語大学に入学されたみなさんは、留学生も含めて日本語の自由な使い手であり、英語やそれ以外の言語に深くかわっていかれることでしょう。外語大への入学を機に、改めて日本語という言語に出会い直してもらえたらという趣旨のもとに選んだのがこの三冊です。

①は、現代の世界における日本語と英語をめぐる状況を見詰め、危機意識をもって日本語の価値を考え直し問いかけるものです。読かれている近代日本文学の豊かさにもぜひじかに触れてもらいたいのですが、ここでは英語母語者で日本語をその文芸作品の表現言語として選んだ二人の作品を挙げました。アーサー・ビナードは詩人でリービ英雄は小説家です。

②の詩集では、日本語がまさに水を得た魚としてきらきらと輝くさまが味わえます。

③は、世界を震撼させた九・一一体験から

書かれた小説ですが、アメリカ人の著者が日本語を得て初めて表現し得た世界が描き出されています。

木村晴茂

(きむら はるしげ)

学術情報課 課長

①福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書、二〇〇七年

②ニール・ドグラス・タイソン『ブラックホールで死んでみる―タイソン博士の説き語り宇宙論』吉田三知世訳、早川書房、二〇〇八年

③サイモン・シン『フェルマーの最終定理』青木薫訳、新潮社、二〇〇〇年(同文庫版、二〇〇六年)

東京外国語大学は「言語を通して世界の諸地域に関する理解を深めることを目的」とした大学ですから、みなさんがこれから出会う本たちは、言語とそれを通して広がる世界への扉を開いてくれることでしょう。

しかし、時々違う場所へも寄り道をしてはどうでしょう。そして、若くて柔軟な脳味噌があるうちに、引き出しを増やしておくの

省や平和への想いを伝える作品であった。しかしそれ以上に私を惹きつけたのは、往々にして作品に不在の、この戦争を実体験したフィリピン人の凄絶な語りであり、その物語とともに記憶されてきた地形や地名であった。場の記憶は衰えることなく、私も彼らと山中を歩き回るなかで追体験し、この地域がいつしか単にデータを供するフィールドではなくなったのである。

加藤さつき (かとう さつき)

学術情報課 資料サービス係

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』三省堂、一九八八〜二〇〇一年
町田健『言語世界地図』新潮新書、二〇〇八年

附属図書館のカウンターでは、「〇〇という本はどこにありますか?」という質問をよく受けるのですが、頻繁に照会があるタイトルの一つが『言語学大辞典』です。

新年度には、授業で紹介されるか課題に関係するのでしょうか、新入生らしき学生さんから『言語学大辞典』はどこですか』『言語学

の辞典を探しています」と必ず聞かれますので、「二階参考室奥の高書架の『A/810』という分類の棚に並んでいます」と案内しています。

大辞典は全七冊、収録言語数は約三千五百です。言語名の一覧を眺めているだけでも世界の広さと厚みを実感できます。ご自分の専攻語に留まらず、興味の向くまま世界の言語を逍遙してみたいかがでしょうか? (別巻「世界文字辞典」はビジュアル的にも楽しめます。)

面白そうだけれどもあまりに大部で……という方には、『言語世界地図』をおすすめします。わずか二百十六頁の新書版に、主要四十六言語の成り立ち・特徴・話者分布地図から使用地域や国家の政治経済状況までが簡潔に整理されていて、あっという間に世界を一周できます。

船旅的「大辞典」と衛星軌道から概観するような「世界地図」、好んで体験してください。

金指久美子 (かなさし くみこ)

総合国際学研究院准教授 チェコ語・スラヴ語学

知識や情報を得るためだけの読書って味気

ない。「役に立つもの」ばかりを追いかけて読む人ってどうも……。常々こう感じているので、小説を取り上げることにします。外国語学部で学んでいると、翻訳作品と付き合うことがどうしても多くなってしまうので、あえて日本のものを。しかも、文庫や新書で手軽に読めるものを選びました。

伊坂幸太郎『砂漠』実業の日本社Jノベル・コレクション、二〇〇八年

恩田陸『Q&A』幻冬舎文庫、二〇〇七年

吉田修一『パレード』幻冬舎文庫、二〇〇四年

一気に読めます。笑えます。ぞっとします。しかも、読み終わったときに「あー、おもしろかった」以上の何かが心に残るはず。これらの本の中のせりふやシーンを思い出すことがあり、私はときおり読み返しています。

川口健一 (かわぐち けんいち)

総合国際学研究院教授 ベトナム文学

①鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』NH

Kブックス、一九七八年

ポール・アザール『ヨーロッパ精神の危機

1680-1715』野沢協訳、政法大学出版局、

一九七三年

原著は一九三五年出版。カッシーラーなどと並んで啓蒙思想の概観を得るために必読の文献といえますが、近年の研究成果からすればさすがに物足りないところも散見されるようです。とはいえ、知、情、意、絶妙に均衡のとれたアザールの叙述と、野沢協訳の明晰な翻訳があいまって、この書物には不滅の光輝が賦与されています。

中井英夫『中井英夫全集1 虚無への供物』

創元ライブラリ、一九九六年

日本の探偵小説史上における金字塔であるとともに、戦後文学の重要な成果でもある本書（初出一九六四年）は、昭和という時代を知らない世代にとってこそ一読の価値があるといえるでしょう。

手塚治虫『手塚治虫アンソロジー 猫傑作集

2』秋田文庫、二〇〇三年

私は猫好きではなく、手塚ファンでもないのですが、國木田独歩作「武蔵野」（一八九八年）からの卓抜な引用（というより換骨奪胎）を含む、短篇「赤いネコ」（一九五三年、『鉄腕アトム』シリーズの一篇）に、幼少期、鮮烈な印象を与えられました。武蔵野の一角に位置する大学に学ぶすべてのひとに読んでもらいたい歴史的な名作です。

鈴木 茂

（すずき しげる）

総合国際学研究院教授 ブラジル史

トマス・モア『ユートピア』沢田昭夫訳、中

公文庫、一九七八年

ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー

』平井正穂訳、岩波文庫、一九六七年

ジャン・ド・レリー『ブラジル旅行記』二宮

敬訳（レリー、ロードニエール、ル・シャ

ール『フランスとアメリカ大陸 二』大航

海時代叢書第II期第20巻）、岩波書店、一

九八七年、所収

トマス・モア『ユートピア』（一五一六年）

とダニエル・デフォー『ロビンソン・クルー

ソー』（一七一九年）は、人文・社会科学の

入門段階で必ず登場する作品である。前者は「羊が人を食い殺す」という有名な文句とともに、イギリスの歴史のみならず近代ヨーロッパ思想上の重要な文献であり、後者はその主人公が「資本主義の精神」を体現する近代の人間類型として、マルクスやヴェーバーも言及している。

意外にも、この二作品はブラジルと関係している。「ユートピア」での経験を語るヒュトロダエウス（ヒスロディー）も、絶海の孤島に一人取り残されたロビンソンも、出港地はブラジルなのである。大文字の人文・社会科学にとっては些末な事柄であろう。しかし、この「細部」にこそ近代世界の一面が現れていると感じられるようになれば、「ヨーロッパ中心主義」から一歩抜け出せたと言えるかも知れない。それにしても、どうしてブラジルはいつも「楽園」の入口にあるのだろうか。一五世紀半ばに一〇ヶ月間リオに滞在した、カルヴァン派のフランス人ジャン・ド・レリーの『ブラジル旅行記』（一五八〇年）などの実験と読み比べてみてほしい。

は決して無駄ではないと思います。そういう意味で、どうしても疎遠になりがちな、自然科学系の本を取り上げてみました。

①は、「生命とは何か」について、研究者の現実や分子生物学の歴史を織り交ぜながら魅力的な文章で読ませてくれます。②は宇宙に関するエッセー。最新の宇宙物理学から「科学と神」についてまで幅広い話題を提供してくれます。③は、三世紀にわたる数学上の難問が証明されていく過程を追ったノンフィクション。どれも専門的な用語や知識をほとんど必要としない、良質の読み物です。

木村有美子

(きむら ゆみこ)

学術情報課 資料サービス係

小林頼子『フェルメールの世界―17世紀オランダ風俗画家の軌跡』NHKブックス、一九九九年

せっかく大学生になったのだから、平日の、ちょっとした暇な時間は美術館で過ごしてみよう。美術館といえば、上野・六本木。土日人は多いですが、平日の朝や昼すぎくらいはほんとうに居心地のよいところです。

さて、「思い立ったが美術館日和」を楽しむために、今回の一冊をおすすめします。主人公は、人気のフェルメールですね。

この本は、十七世紀オランダの時代背景だけでなく、フェルメールに関する統計値や先行研究も踏まえたもので、読み応えは十分あります。とはいえ、「フェルメールの師となりえた人物とは、一体、誰だったのか」、「フェルメールの想定していた部屋とは、一体、どのようなものだったのか」という具体的な疑問をひとつひとつ解消していく過程にひきこまれて、はじめて美術にふれる方でもお楽しみいただけると思います。授業が休講になった晴れの日には、図書館で本を借りて、美術館にいらしてみませんか。きっといい一日になります。

柴田勝二

(しばた しょうじ)

総合国際学研究院教授 日本文学

福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫など、初出は一八一七〜一七六六年

夏目漱石『こころ』新潮文庫など、初出は一九一四年

いずれも〈超定番〉ではありますが、大学生になったみなさんにぜひ読んでもらいたい作品です。明治維新期に書かれた『学問のすすめ』では、「学問」が決して机上のものではなく、現実世界を生き抜く自己を確立するための手立てであることが明確に示されています。当時は日本が西洋列強の侵攻に晒される危機的な時代でしたが、ここに提示されている国際社会の見取り図は、ある意味では過酷な経済競争のなかに置かれている現在にも通じるものです。

『こころ』は福沢を引き継ぐ形で明治から大正を生き抜いた漱石が、明治という時代を総括するために書いた作品です。友人を出し抜いて下宿先の女性を妻とした「先生」という人物は決して善人ではありません。そこには危機的な時代を生き延びるためにアジアへの侵略者となってしまった近代日本への、漱石の批判的な眼差しが込められています。日本の近代を知るためにも、あらためて読み直してほしい作品です。

鈴木 聡

(すずき あきら)

総合国際学研究院教授

英語・批評理論・アングロ・アイリッシュ文学

絹代が演じ……といっても旧世代にしか通じない名前でごめんなさい。ただ、私の父が結婚で長期療養していた頃に母と見に行った映画で、家に帰ってきた父はやはり遠く……という我が現実と、その後で実際に読んだ幸田文の原作のおさえた情感あふれる文章があいまって、自分を見つめるきっかけになり、それまで外国翻訳物ばかり読んでいた私が、日本近代の女性文学に関心を向ける契機ともなった作品。その後大学に進んだ頃にまた興味は外国（文学）に戻るのだけと……。「外大新入生にすすめる本」としては違うかなと思いつつ、私には自己省察への誘いとなったこの本を敢えて……。ちなみに岸恵子さんは、いまなお格好いいなと思う女性の一人であり続けています。

千葉亜紀子（ちば あきこ）

学術情報課 総務係

①土居健郎『「甘え」の構造』（増補普及版）

弘文堂、二〇〇七年

②斎藤隆介作、岩崎ちひろ絵『ひさの星』岩

崎書店、一九七二年

この二冊、共通点があるのですが、わかりますか？

①は、他人や異文化への理解が深まるのもちろんのこと、自分自身をとらえ直すきっかけにもなります。増補普及版は読みやすい体裁のため、「代表的な日本人論で難しそう」と読まず嫌いをしないで、是非、読んで欲しいと思います。

②は、有名なおふたりの作家による印象的な創作絵本です。内容は敢えてご紹介しませんが、発行されて三十年以上経った現在でも、インターネット上で感想が述べられることがある、いろいろな読み方、感じ方ができる奥の深い作品です。

実は、この二冊、同じ時代に発行されており、時代背景から着想を得ているという共通点があります（『甘え』の初版は一九七一年）。時代背景を重ね合わせて内容や作家を理解する愉しさも経験してもらえたらと考え、この二冊をお薦めします。

千葉敏之（ちば としゆき）

総合国際学研究院准教授

ドイツ語／ドイツ・ヨーロッパ中世史

マルク・ブロック『王の奇跡―王権の超自然的性格に関する研究／特にフランスとイギリスの場合』井上泰男・渡邊昌美訳、刀水書房、一九九八年

フランス・アナール学派創設者の一人で、ナチスに対するレジスタンス運動に散った歴史家マルク・ブロックの著者。中世の王たちが癩癩患者に触れる（ロイヤル・タッチ）ことで発揮した超自然的な治癒能力について、宗教人類学的見地から、精密な史料実証に基づいて解き明かす、畢生の名著。

アンリ・フォション『至福千年』神沢栄三訳、みすず書房、一九七二年

両大戦間期にパリ大学の中世芸術史講座教授を務めた美術史家フォションによる、紀元千年論。ヨハネ黙示録に描かれたキリストによる千年王国を待望し、それに恐怖する西暦一〇〇〇年のヨーロッパの姿を、類まれなる観察眼と筆致で綴った著作。歴史を見る鋭い眼差しは、今なお色褪せない。

彌永信美『幻想の東洋―オリエンタリズムの

関口時正（せきぐち ときまの）

総合国際学研究院教授

ポロランド文化・比較文学

- ① F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Penguin Popular Classics, Viking Pr, 2007
- ② Joseph Conrad, *Hearn of Darkness*, Penguin Popular Classics, Penguin Classics, 1994
- ③ New Testament

三点どれもすぐ手に入り、安い。①、②ともあまり長くないけれども、噛みごたえのある文章なので、じっくり読める小説。小説といっても斜め読みはできないので、詩に近いかもしれない。①の筋がどういふものだったか、まるで覚えていないけれども、個性的でみずみずしい、寶石のような言葉を味わった鮮烈な感覚だけは残っている。登場人物が人を呼ぶのに sport と言っていたことも覚えている。①の村上春樹の翻訳がどういふものか知らないが、②はたぶん翻訳で読まない方がいいと思う。一九〇〇年ごろにどうしてこういうものが書けたのか不思議だ。船乗りの使う日常的できつぱりとしたゲルマン系（*ゲルマン系*）の言葉と、その多くがポロランド語、フラン

ス語から密輸されたのではないかと思われるラテン系の抽象的で難しい言葉が綯い交ぜになって織り上げられた、詩的で、奇怪で、強力な文章。③の『新約聖書』は、福音書だけでもいいと思う。そうすればとても短い。いろいろな意味で読む者を育て、鍛えてくれる書物。

立石博高（たていし ひろたか）

総合国際学研究院教授 スペイン語・歴史学

ジョセップ・フォンターナ『鏡のなかのヨーロッパ』立石博高・花方寿行訳、平凡社、二〇〇〇年

「われわれはいったい何者であるのか？何処から来て、何処へ行くのか？」の大きな問いに答えるための手がかりを与えようと、ヨーロッパの卓越した歴史家たちが自らヨーロッパの歴史を大胆に見直そうとしたのが、ジャック・ルゴフを総監修者とする『叢書ヨーロッパ』である。これは全二十巻予定の歴史書シリーズで、言語、啓蒙思想、農民、食文化など多様なヨーロッパの相貌をつかむのに格好の作品である。その一冊、フォンターナ教授の『鏡のなかのヨーロッパ』は、「固

有の優れた文化と社会をもつヨーロッパ」というイメージを、ヨーロッパ人自らが解体しようとした優れた試論である。とくに注目されるのは、他者を劣ったものと見なす他者認識と自らを正統化する自己認識とは表裏一体であるだけでなく、こうした自己認識／他者認識の構造と重なるかたちで、ヨーロッパという空間の内部における支配／被支配の構造が、「ヨーロッパ的なるもの」を絶えず生み出してきたことである。「我らが文化」という歪んだ鏡の間から抜け出す鍵を本書は提供してくれらるだろう。

谷川道子（たにがわ みちこ）

総合国際学研究院教授

ドイツ語・ドイツ語圏の文学・舞台芸術

幸田文『おとうと』新潮文庫、二〇〇〇年

何にしようかと心の中を探っていたら、なぜかこの本が、というよりこの自伝小説の映画化が、ぼっかり浮かんできた。市川崑監督の一九六〇年の作。十七歳の主人公を岸恵子、結核で夭折する「不良」の弟を川口浩、厳格な作家の父の幸田露伴を森雅之、継母を田中

①ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』

(全五冊) 亀山郁夫訳、光文社古典新訳文庫、二〇〇六～〇七年

②ブルガーコフ『巨匠とマルカリータ』(『世界文学全集』第1集第5巻) 水野忠夫訳、河出書房新社、二〇〇八年

③アクーニン『リヴァイアサン号殺人事件』

沼野恭子訳、岩波書店、二〇〇七年

ロシア文学から三冊ご紹介しましょう。

①は、言わずとしたドストエフスキーの代表的長編。ロシア文学者である本学の亀山学長による新訳です。ミリオンセラーとなり「カラ兄」現象を巻き起こしたこの作品は、一世紀以上も前に書かれたとは思えないほど現代的なテーマをたくさん含んでいます。それに何といっても「物語」として面白い!

でも痛快この上ない巧みなストーリー展開という点では、ブルガーコフの畢生の大作②だって負けてはいません。騙されたと思って読んでみてください(騙したりしませんよ!)。作家の死後よみがえったこの作品は、今や二〇世紀ロシアの生んだ最高傑作のひとつといわれています。

③は、現役人気作家アクーニンの推理小説

です。ロシアに推理小説? しかも「アクーニン」というペンネーム、日本語の「悪人」をもじったものなんですから。それぞれ味わいは異なるものの、どの作品もはらはら、ドキドキ……きつときめきの時間をブレゼントしてくれることでしょう。

博多かおる (はかた かおる)

総合国際学研究院准教授 フランス文学・文化

オノレ・ド・バルザック『ゴリオ爺さん』

(上・下)、高山鉄男訳、岩波文庫、一九九七年

サン・テグジュペリ『人間の大地』堀口大樹

訳、新潮文庫、一九五五年
『武満徹エッセイ選―言葉の海へ』小沼純一

編、ちくま学芸文庫、二〇〇八年

個人の限られた視野に窓や出口をつけてくれる本を読みたいものだ。推薦したい小説は多々あるのだが、例えば『ゴリオ爺さん』を含むバルザック『人間喜劇』の小説群は、人間について、現実生活ではできない途方もなく豊かな観察をさせてくれるし、社会を読み解く幾多の手がかりを与えてくれる。

もちろん読書は疑似体験以上のものだ。そのことを実感させてくれる一冊として『星の王子さま』の著者サン・テグジュペリの『人間の大地』を挙げたい。パイロットだった作家が語る地球各地と上空でのエピソードには感動を禁じ得ない。人間と大地への愛にねぎした考察に支えられているからだ。それを語る言葉の力には存在の奥底から揺さぶられる。人間の尊厳や生命、友情、文明とは、現代における行動や勇気とは何なのか、読む前と同じようには考えられなくなるだろう。

最後に、世界の文化と社会について学ぶ人に、作曲家、武満徹のエッセイを勧めたい。世界各地の音楽、文化や人間と多角的に、真摯に向き合わせてくれるだけでなく、「私たちの耳はきこえているか」という、二十一世紀に生きる人間が広い意味で常に自分に問いかけるべき疑問に気づかせてくれる。同じシリーズの『武満徹 対談選』も、文化を考える上で重要な鍵をたくさん含んだ本だ。

早津恵美子 (はやつ えみこ)

総合国際学研究院教授 日本語学

ものの見方・考え方を意識させられる本を

系譜』筑摩書房、二〇〇五年（初出は一九九六年）

西洋文明が古来抱いてきた「東洋」インド幻想（イマジネール）を、ヨーロッパの自己認識を探る〈鏡〉として学知横断的に読み解いていく、知的興奮に満ちた著作。

敦賀陽一郎

（つるが よういちろう）

総合国際学研究院教授 フランス語学

①モリエール『孤客』辰野隆訳、岩波文庫、一九四〇年／二〇〇八年『人間嫌い』という訳もある。MOLIÈRE: *Le Misanthrope*, 1666)

②マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳（旧訳＝一九四六年）、廣松渉編訳・小林昌人補訳（新訳＝二〇〇二年）、岩波文庫（Karl MARX, Friedrich ENGELS: *Die Deutsche Ideologie*, 1846）
③松尾芭蕉『おくのほそ道』（一七〇二年）、岩波文庫、二〇〇一年

フランスのデカルト『省察』（原文ラテン語）、ルソー、ユーゴ『ノートルダム・ド・

パリ』、バルザック、ボードレール『悪の華』、サルトル、スイスのピアジェ『生物学と認識』、ドイツのカント『純粹理性批判』、日本の『平家物語』、荷風（一八九九年清語科除籍）『澤東綺譚』、太宰『津軽』、ロシアのドストエフスキー、英国のダーウイン、ギリシャのアリストテレス、イタリヤ、千一夜、仏陀、老荘、……と迷うが、編集者に「カット！」されそうなので、三点推薦の一言を。

①は集団の中に生きる人間も所詮は個。モリエール（四十四歳）の本音に共感を。②は、その人間が人間に進化しえたのは、また人間とは社会とは、の根幹を二十八歳と二十六歳の著者がどのようにして。③は枯れた感があるが、芭蕉（五十一歳没）の達した境地の外の内の描写を音・意味直観を働かせて。留学生諸君も。翻訳でもかなり伝わって来るが、複数の言語が分るとよりいい。

鶴田知佳子

（つるた ちかこ）

総合国際学研究院教授 通訳・翻訳

ロンブ・カトー『わたしの外国語学習法』米

原万里訳、筑摩書房、二〇〇〇年

五カ国語の同時通訳者、十カ国語の通訳者、十六カ国語の翻訳者として、九十歳を過ぎても尚新しい言語の習得に挑戦したという著者による、外国語学習法に関する快作。外国語を勉強する際のヒントに満ちている本書は、本学で今まさに新しい言語に取り掛かろうという皆さんにピッタリだと思います。私が本心から同意した主張に、次のようなものがあります。

「消費された時間＋意欲÷羞恥心＝結果」である、つまり物おじをしていたのではコミュニケーションはとれないということが豊富な例とともに挙げられています。皆さんも是非積極的に学び、世界を広げてください。

教師並びに通訳者として働くのに向いているタイプは、自分の内側に閉じこもりがちではない人、脚光を浴びるのを恐れない人と語られています。本学を出てこの二つの職業に就きたいと思う人たちにとても参考になる本です。加えて、本書を翻訳しているのが本学卒業生でロシア語通訳第一人者であった米原万里さんであることもポイントです。

沼野恭子

（ぬまの きょうこ）

総合国際学研究院教授 ロシア語・ロシア文学

『新ゴーマニズム宣言 戦争論』においても随所で繰り返されている。一方、〈人間性〉の普遍性論に立ったラスカサスの〈インディオ〉擁護の主張は、畢生の大作『インディアス史』全巻に込められており、幸いなことに岩波書店の大航海時代叢書第Ⅱ期シリーズの中の全五巻の完訳として日本語で読むことができる。さらに、コロンブスの新大陸到達五百年記念事業として出版が企画された「アンソロジー新世界の挑戦」シリーズにおいて、ラスカサスの『インディアス史』の主張の要点が、『(1) 裁かれるコロンブス』、『(8) インディオは人間か』、『(13) 歴史の発見』の三冊にまとめられている。この論争全体を歴史的脈絡においてコンパクトにまとめた本としては、L・ハンケ『アリストテレスとアメリカ・インディアン』(佐々木昭夫訳、岩波新書、一九七四)があり、本書と併せて読んで欲しい。文化／社会人類学の原点が、ここにある。

ミシェル・ド・モンテーニュ『エッセー』²

宮下志朗訳、白水社、二〇〇七年

宗教戦争と異端審問が吹き荒れる時代のヨ

ロッパにおいて、「寛容であることとは」と問い続け生きた一人の知識人の思考の軌跡を示す『エッセー』。その第一巻三十章「人喰い人種について」と題されたあまりにも有名な章は、後世のいかなる書物よりも〈文化相対主義〉の意義を平易にかつ徹底して、現代の我々の眼前に示してくれる。〈文化相対主義〉とは、人間における多様性の並置などと言ふ愚にもつかない主張などではない。「ブラジルのインディオは、人を食べる。しかし、彼らに野蛮なところなど何もない。もし、くを野蛮と呼ばないならば」と、モンテーニュが提起する迫真の問い。日本の戦国時代に生み出された〈人間性〉をめぐるこの問いの中に入る「く」の文言を、今を生きるあなたにはたして一人で見出すことができるだろうか？

ブーガンヴィル／デイドロ『世界周航記／ブーガンヴィル航海記補遺―実録VS. 架空旅行記』(シリーズ世界周航記2) 山本淳一・中川久定訳、岩波書店、二〇〇七年

一七七一年に出版されたブーガンヴィルの『世界周航記』は、自身の一七六六年〜一七六八年の世界一周航海に基づく実録である一

方、一七七四年出版のデイドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』は、前者に触発されて書かれた架空旅行記にはかならない。十八世紀後半、世界一周航海そのものは珍しい事業ではなくなっていたが、ブーガンヴィルの著作を一躍世上有名にしたのは、〈南海の楽園〉イメージを後世に広めることとなったタヒチ島民の記述である。デイドロも、この『世界周航記』におけるタヒチ島民の記述に衝撃を受けた一人である。架空旅行記は、ブーガンヴィル一行を迎えたタヒチ島民の反応、ブーガンヴィルの船団に乗船していたカトリックの司祭と島民との架空問答、および『ブーガンヴィル航海記補遺』を読んだとされる作中人物二名の会話の三場面から成る。タヒチの習慣に従い客人であるカトリックの司祭に対し、自分の娘を一夜妻として提供することを申し出るタヒチ島民の男性、それを〈宗教〉を口実に断るフランス人司祭、人間の本性に反することを命令する〈宗教〉とやらの説明を求め司祭に詰め寄る件の男性、司祭の運命やいかに？ 抱腹絶倒の会話が繰り返される。〈文化相対主義〉の極北と実践の問題を、これほど愉快に示した本を、私はほかに知らない。ブーガンヴィルの『世界周航記』がも

二冊。ひとつは、西郷信綱の『古典の影―学問の危機について』（平凡社ライブラリー、一九九五年。五八〜九四年に書かれた十数篇の論文・小文集）。著者は、近代日本の学問が日常生活や経験の世界を忽せし大地に根を張ることを怠ってきたとし「学問の故障は客観主義の故障なのだ」という。また学問の真の科学性や合理性の保証にとって大切にされるべき「思考や精神の『厳正さ』（Strength）」がないがしろにされ、「技術や操作の『精密さ』（Exactheit）」のみが追究されるのに疑問を呈する。「読むことを学び直すこと」を学問上の格率とし、国文学の見方にとどまらず多面的・複眼的な見方から『古事記注釈』をまとめあげた著者でもある。

もう一冊は、朝日新聞主幹をつとめた筈信太郎の『もの見方について』（河出書房、一九五一年）。イギリス人・ドイツ人・フランス人のもの見方・考え方が著者の立場から理念化されていて、戦後の日本人に広く読まれた。六十年近く前の書でもあり、類型化そのものは必ずしもあてはまらないだろうが、ものの考え方のいろいろな型について考えさせられる。

本としては少しかわっているが、池田香代

子『世界がもし100人の村だったら』（マガジンハウス、二〇〇一年）は、環境学者ドネラ・メドウズ氏の書いた一九九一年の小文がインターネットを介して改編されながら世界に伝えられたものを、池田氏が再話というかたちでまとめたもの。世界の全人口を百人の村に縮小したら、使用言語、経済状態、宗教などの違いはどんな割合なのか？ 十七人が中国語・九人が英語・八人がヒンディー語とウルドゥー語を話し……、三十三人がキリスト教徒・十九人がイスラム教徒・十三人がヒンドゥー教徒であり……、すべての富の五十九％を六人が持ち、二％を二十人が分け合っている。また、二十人は栄養が不十分、一人は死に瀕し、でも十五人は太り過ぎ……、といった数字が示される。世界の状況は思いのほか知らないのではないだろうか。

深澤秀夫

（ふかざわ ひでお）

アジア・アフリカ言語文化研究所教授
社会人類学・マダガスカルを中心とするインド洋海域世界研究

岩波書店、一九九二年

一四九二年のコンゴスによる（新大陸発見）以降、スペイン人による征服の名のもとに行われた（インディオ）と名付けられた先住民の殺戮や社会の破壊、強制労働や外来感染症による人口の激減が、新大陸各地において生じた。ドミニコ会派の司教ラス・カサスは、このような状況を法的不正義であると共に、キリスト教に背く由々しき罪と考え、スペインの新大陸政策を厳しく糾弾した。その結果、一五五〇年〜一五五一年にかけスペイン国王カルロス一世が召集した直属の審議会において、このラス・カサスとスペイン人入植者の利益と現状を擁護するアリステレス研究者として名高いセブルベダの二人が、激しく議論を交わした。この論争を、審議会が開催された都市に因み、（バリャドリッド論争）と呼ぶ。この論争におけるセブルベダの基本的主張を著したのが、本書である。〈文化相対主義〉が対峙してきた（人間性）をめぐる一方の側の思想とは何かを知る、格好の一書である。（インディオ）に対する征服戦争や強制労働制度などを正当化するセブルベダの論法は、小林よしのりの一連の

セブルベダ『征服戦争は是か非か』（アン

ソロジー新世界の挑戦）7）染田秀藤訳、

私は、みなさんにもこの図書館のどこかで、そんな一冊に出会ってもらいたいと願っています。

水野善文（みずの よしふみ）

総合国際学研究院教授
ヒンディー語・インド文学・インド思想

鈴木大拙『日本の霊性』（岩波文庫、中公クラシックス、大東出版社など諸版あり）

河合隼雄『ユング心理学と仏教』岩波書店、

一九九五年

初めて訪れた地で、自然の風景や建物の風情に感慨をおぼえることは良くあるだろうが、時には、そこを往来する人々も含めて、その空間すべてから醸し出される香りのようなものを感じとることもあるだろう。

人間の一人ひとりに知性、理性、感性が備わっていて、自身で意識できるが、多くの人間がひと包みに覆われ、ある集団レベルで共通の性質に彩られていながらも自らそれを意識することが難しいのが、大拙のいう霊性である。彼はそれを太古からの歌を材料として分析し、日本的なるものが称念仏に発すると言う。

ユングが集会的無意識と表現したのは、大拙の霊性に相当するのではないかと思う。

君が今そこに生きているのは、宝くじの何億万分の一という稀有な確率のはずだが、他者との無限の関係性のなかに存在している。決してひとりではありえない。我々は多くの先祖たちが薫習した霊性のなかに生かされつつ、次代の霊性を彩るべく生き様を晒さねばならない。今や地球的霊性も求められている。

村尾誠一（むらお せいいち）

総合国際学研究院教授 日本古典文学

『源氏物語』

恐れずに原文で読もう。最初から全部読むとすると挫折する。どこからでもよい、気軽に読み始めよう。一帖でも読めば深い文学体験が成立するはずである。角川ソフィア文庫はじめ、小学館新日本古典文学全集、岩波新日本古典文学大系等々で読める。

立原道造『立原道造詩集』

現代日本語は文学言語として成熟している

だろうか。未熟さ故の魅力を示すこともある。天折した詩人の思わぬ深さにも傑然とするであろう。岩波文庫（一九八八）は絶版だが、ハルキ文庫（二〇〇三）で読める。できれば、彼の師である堀辰雄にも読書の網を広げてほしい。

森有正『パヒロンの流れのほとりにて』筑摩書房、一九六八年

外国を学ぶとはどういうことなのか。パリでの日記体の文章は、真摯である故の若干の苦さと滑稽さも含みながら、豊饒な精神世界を示す。古書でオリジナルを入手することもできるし、二宮正之編『森有正エッセー集成（一）』（ちくま学芸文庫）でも読める。

村上遥

（むらかみ はるか）
学術情報課 図書情報係

『モッラー・ナスロッドティーン物語（イラン笑話集）』黒柳恒男・日下部和子訳注、大蔵学書林、一九八九年

新入生のみなさんに、私がペルシア語専攻

たらしめたタヒチ島民の報告の影響は、陰鬱なパトスに彩られたマルキ・ド・サドの著作の中で異彩を放つ『食人国旅行記』（初版一七八八。濹澤龍彦訳、河出文庫、一九八七）におけるタモエ国の記述にも見られ、自己同化を戦略的に拒否する（文化批判）と言う新たな十八世紀エキゾティシズムの実果は、現代へと続く。

藤井守男

（ふじい もりお）

総合国際学研究院教授 ベルシア語・ベルシア文学

井筒俊彦『イスラーム思想史』中公文庫、一九九二年

イスラーム哲学、神秘主義、「イスラーム哲学」（スコラ哲学）の各分野の史的発展と展開の内実が見事に整理されている名著。イスラームに係わるすべての領域の基層を理解する上で必読の書といえる。

井筒俊彦『イスラーム哲学の原像』岩波新書、

一九八〇年

イスラーム哲学に独自性を付与している

「神秘主義」（スーフイズム）に係わる議論の中でも、「神秘主義における主体的意識」の本質を考察したもの。講演録ということもあって、文章も明晰で、神秘主義に関する難解な内容を端正な日本語で読み進めることができる。特に、イブン・アラビー（一二四〇年没）を創始とする存在哲学に関する箇所は神秘主義文学論としても優れている。

S・H・ナスル『イスラームの哲学者たち』黒田壽郎・柏木英彦訳、岩波書店、一九七五年

イスラーム哲学を体系化したアヴィセンナ（イブン・スィナー…一〇三七年没）、哲学的認識論と神秘主義的照明体験とを再構成し、「光の形而上学」を打ちたてたヤヒヤー・スフラワルディー（一一九一年没）、神秘主義の哲学的理論化を進めたイブン・アラビー（一二四〇年没）という、その後のイスラーム思想の潮流を決定付けた三人の思想家の人物と思想を日本語で概観できる好著。

古橋英枝

（ふるはし はなえ）

学術情報課 情報サービス係

ミヒャエル・ゾーヴァ画『ミヒャエル・ゾーヴァの世界』那須田淳・木本栄構成／訳、講談社、二〇〇五年

コーヒーカップの横に置かれた新聞。にやりと笑ったサラリーマンの写真。その上にちよこんと立っている、真紅のマントのちいさな王様。

一見するとかわいらしい王様ですが、その丸々とした頬に埋まる黒い瞳は、どこか遠くを冷ややかに見つめています。

図書館のカウンターで返却されたこの本は、ページをめくっていた私の指を止め、私が知りうる世界からほんの少しだけ、外に連れ出してくれました。

「学ぶ」ことに必要な「学ぼうとする姿勢」は、専門書にだけ向けるものではありません。日々口にする食事、耳にする音、友人や家族との会話、そして目に飛び込んでくる一枚の絵。これらもまた、書物から得る知識と同じように、様々なことを学ばせてくれます。

常に自分自身に問いかけ、琴線に触れるものをきちんと拾い集めることはすべて「学ぶ」ことであり、独自性を生み出すことにつながっていくのではないのでしょうか。

学を批判するのはわかるよ。だけど、新しい

メディアのことは教えなくても学生はもう自分で身につけてるんだよ。文学をどう読むかこそ、大学で教えないといけないんじゃないの。」メディア論にかぶれ、またおそらくは自分自身に根強く巣食う教養主義的価値観に対する自己憎悪もあって、伝統的な文学研究に対して鼻息の荒かった私に向けての言葉だった。新しいメディアについて語ることが必要だという思いに今でも全く変わりはない。

だが、いかにテキストを読んでいくかをなんとか一緒に経験してゆきたいという気持ちがいまでは自分の授業の軸になっている。

①聖書は文字通り必読の書。キリスト教文化圏の文化・社会を理解するためにはその知識なしには話にならない。さらにいえば、このテキストがどのような力学、文化的プロセスのうちに形成されることになったかも非常に興味深い。

②『レ・ミゼラブル』そのものが必読というわけではないかもしれない。単に「ストーリー」をたどるような読み方ではなく、長編小説というものがどれほど壮大な世界の構築となっているか、また伝統的な語りのあり方がどのようなものなのか、身体で感じ取って

ほしい。

③「書物」という形式をとりながら、すでに文字メディアのパラダイムを超え出た思考実験でもある。不思議な体験。

④三〇冊推薦という反則技。これは個々の作品の魅力もさることながら、このチョイスがほんとうに愉しくさせてくれる。だから、個々の作品とともに、この池澤夏樹によるまったく新しい「世界文学全集」の顔ぶれそのものに拍手したい。

大和加寿子（やまとかずこ）

学術情報課 図書情報係

アニー・トレメル・ウィルコックス『古書修復の愉しみ』市川恵里詠、白水社、二〇〇四年

あるきっかけから書籍修復家である師について書籍の修復を学ぶことになった主人公の、修復家としての自己の確立の過程を描いたものです。主人公は、自分の飛び込んだ製本工芸と書籍修復の世界の魅力に取り付かれ、ついには修復家を目指して修行に専念することにします。ところが師匠が突然病に倒れ、主

人公はまだ半人前のまま取り残されてしまします。どうして学んでいけばいいのか、悩み、工夫した末、主人公は「結局は自分で自分に教えるしかないのだ。……私は自分自身の弟子になるう……」という答えを見出します。わからないことがあると、師匠の過去の仕事を調べ、対象をよく観察し、また人に聞いて問題を解決していきます。問題を認識し解決策を探っていくことは自分でやるしかない、という意識と行動がすなわち「自分で自分を教える」ということだったのです。それは主人公にとって、決まった師匠のいない半人前の職人が熟練するまでの旅の歩を進めていくよりどころの発見でした。随所に出てくる書籍の修復過程の記述も魅力的ですが、技術の習得の本質を端的に表しているこの言葉が私は好きです。

吉田恵理（よしだ えり）

学術情報課 雑誌情報係

甲斐徹郎・チームネット『まちに森をつくって住む』OM出版、二〇〇四年

最近では環境問題も有害物質による汚染より、

の学生として東外大に入学したばかりのとき、附属図書館ではじめて借りた本を紹介したい。

この物語は日本でいう、とんち話、たとえば吉四六よむよむさんのようなお話だ。当時イランについてほとんど未知であった私は、主人公モッラー・ナスロッディーンの滑稽なやりとりで魅了された。「モッラー」はイスラーム僧という意味であり、この話がアラブやトルコでもそれぞれ別の名前では有名だということを知ったのはだいぶ後のこと。ユーモラスな「笑い」は私にとって異文化を知るための最良の出発となった。

もともと外国の「笑い」はむずかしく、なぜこれで笑えるのだろうかと首をかしげることもある。しかし笑いを通して他の文化に疑問をいだくことがすでに『異文化理解』の第一歩なのだと思える。なにより笑い話の向こうにいる、笑い転げる人々の、なんと人間らしい姿を思い描いてみてほしい。あたたかい心地とともに、彼らへの興味がぐっと深まりはしないだろうか。

これから学び始めるみなさんも、ときには笑いに目をとめてみてほしい。きっとすてきな出会いがあるはずだ。

柳原孝敦

(やなぎはら たかあつ)

総合国際学研究院准教授
スペイン語文学・思想文化論

①ガブリエル・ガルシア・マルケス『コレラの時代の愛』木村榮一訳、新潮社、二〇〇六年

②矢作俊彦『悲劇週間』文春文庫、二〇〇八年

③柄谷行人『探求Ⅱ』講談社学術文庫、一九九四年

本誌で「ラブレターのすすめ」というエッセイを書いた手前、ここではラブレターに使えるような三冊とその言葉を紹介する。まず①からは「手紙をもらって返事を書かないのは礼儀に反しますよ」。これでラブレターへの返事は保証された。②では、「ころり、洋上のぼくの手にはガラスの筒から転げ出たあの真珠なのである、その目が湛えた光といったらがいい。目元涼しい人に恋したら、こう言って差し上げようじゃないか。最初に「ころり」と言うところがすばらしい。そして、③からは恋愛の本質を突いた一文。「ある男(女)が失恋したときに、ひとは『女(男)は他に

いくらでもいるじゃないか」と慰める。こういう慰め方は不当である。なぜなら、失恋した者は、この女(男)に失恋したのであって、それは代替不可能だからである。愛する人って掛け替えがないのだね。

山口裕之

(やまぐち ひろゆき)

総合国際学研究院教授

ドイツ語・ドイツ文学・メディア理論

①聖書

②ユゴー『レ・ミゼラブル』(全四冊)豊島

与志雄訳、岩波文庫、一九九五年

③ペンヤミン「一方通行路」(ちくま学芸文

庫『ペンヤミン・コレクション』3 記憶へ

の旅』所収、浅井健二郎編訳・久保哲司訳

一九九七年

④池澤夏樹『個人編集「世界文学全集」(全

三〇巻予定)、河出書房新社、二〇〇八年

』刊行中

かつて勤めていた大学を去ることになったとき、ある年配の先生が次のような言葉を**饞**のように語ってくれたことを、いまでも温かい気持ちで思い出す。「山口君が古い文

おり、奇蹟的に生還したオーストリアの心理学者によるホロコースト体験の記録。大学に入ったばかりのころ、某大学で開かれた講演会で、作家の五木寛之さんがこの本を推薦されていました。そのことがいまでも印象に残っています（新版は池田香代子訳、みすず書房、二〇〇二年）。同じ著者による『死と愛―実存分析入門』（霜山徳爾訳、みすず書房、一九八三年）と合わせてぜひ。

中園英助『鳥居龍蔵伝―アジアを走破した人類学者』岩波現代文庫、二〇〇五年

初版は一九九五年。戦時下の東アジアを駆けめぐり、学問の自由を身をもって追究した人類学者の評伝。この本を読んでいたころ、たまたま『村岡伊平治 自伝』（今村昌平企画、講談社文庫、一九八七年。初版は一九六〇年）と出会った。このふたりの男の生き方はなかなかぶつとんです。とくに男子諸君におすすめ。

市村弘正『読むという生き方』平凡社、二〇

〇三年

敗戦の年（一九四五年）、すなわち「戦後零年」に生をうけた批評家による読書＝批評論。大学生としての読書生活は、この本を抜きには始まりません。

ではみなさん、いってらっしゃい。



二酸化炭素の排出が取り上げられることが多くなりましたね。これは私たち一人一人の生活スタイルとも大きく関係している問題です。環境保護への取り組み方は種々ありますが、ここでは住居や住まい方を見直すことで、地域の自然環境を保全・形成し、二酸化炭素の排出も抑えようという提案をしている本を紹介します。

今まで緑化を謳った住宅はそのほとんどが景観上の観点から植栽を施していたのに対し、「環境共生住宅」の普及を目指す著者は、植物にもっと積極的な意味を見い出していこうと書いています。それは、植物には人にとって心地よい微気候（ごく狭い範囲での気候）を作り出す働きがあることです。具体的には本を読んでいただくとして、植物を生活環境にうまく取り入れ、空気の流れを作ることで、冷暖房の使用を控え、「エアコンの温度を〇〇℃に設定する」とは違う、快適な暮らしを送ることができるのです。

吉田ゆり子（よしだ ゆりこ）
総合国際学研究院教授 日本近世史

住井すゑ 『橋のない川』第一部～第六部、新

潮社、一九六一～七三年、第七部・一九九二年（のち新潮文庫刊）

村田静子 『福田英子』岩波新書、一九五九年
屋敷寿雄 『菅野すが』岩波新書、一九七〇年

『橋のない川』は、奈良県の被差別部落を舞台とした小説です。関西出身の両親の会話に含まれる差別的な内容を聞いて育った私は、なぜそのような差別が存在するのか、小さい頃からの疑問でした。ようやく大学生になって、部落差別を主題とした小説や記録を読みあさり、差別的な歴史的な経緯を明らかにしたいと思うようになりました。この本は、現在に至る私の研究の出発点となった印象的な書です。

『福田英子』は、自由民権運動にかかわった女性運動家についての評伝ですが、とても精緻な文章で綴られた本で、簡単に読みとばせない重厚なものです。著者の村田静子氏は、他に幕末・明治維新时期を生きた和歌山藩の儒学者の妻川合小梅の日記を翻刻されています（『小梅日記』平凡社東洋文庫）。

『菅野すが』は、明治期の社会主義運動家ですが、人物そのものにとっても興味を抱きました。大逆事件で処刑された幸徳秋水との関

係で知られています。明治期に生きた女性の評伝は多く世にだされていますが、その代表的な書の一つです。

いずれも、私が大学一年生になったときに、図書館で借りた本で、その後、自分の手許においておきたいと思いついた本です。とくに、『橋のない川』は、当時第六部までしか出版されていませんでしたが、文庫本より大きなサイズの小説を、六冊もまとめて買うことに、とても大きな決断をした記憶が残っています。中学時代の友人が、書店でアルバイトをはじめたので、二割引きで購入した思いの書です。今その本をみると、一冊七五〇円と書かれており、あの時の決断の大きさをみると、ちょっと拍子抜けのようで、逆に驚いています。

竹中龍太（たけなかりゅうた）

東京外国語大学出版会 編集者

ウィクトール・E・フランクル 『夜と霧―ドイツ強制収容所の体験記録』霜山徳爾訳、みすず書房、一九八五年

すすめる本、ではなく、必読書。副題のと